

な風景を描きながら同じ方向へと伸びている。
矢上神社の境内ではお年寄りたちがゲートボールを楽しんでいた。邪魔にならないよう社殿に向かい、お参りをして道中の安全祈願。さあ次のポイントである古賀をめざそう。

古賀は植木で有名なまちで、家々の庭も手入れが行き届いている。国道から少し入ったところに古賀の藤棚があった。長崎から四里七町約十六・三三〇、諫早から三里十八町(約十三・六キロ)と、長崎・諫早間のほぼ中間地点にあたるこの茶屋は、旅人たちに親しまれた休憩場所。藤の花を楽しみながらゆつくりとくつろいだ人々の姿が想像できる。

古賀の藤棚からちょっと足を伸ばして、県下で最古の農家住宅の一つである旧本田家住宅を訪れてみたが、あいにく芽萐き屋根のふき替え作業の途中で、屋根は白いシートに覆われていた。それでも中に入ると大きな土間、そこに「くどやばんどがめ」などが置かれた台所があり、当時の暮らしを知ることができる。ここから街道をたどっていくと山道に入る。峠の茶屋跡、久山茶屋跡を過ぎ、永昌宿へ。

長崎を出発した旅人たちが最初に宿泊したのが永昌宿本陣跡、安勝寺である。ここに泊まったシーボルトは、寺の前を流れる本明川を眺めながら何を思ったのであろうか。遠く離れた祖国のことか、それともこれからめざす江戸のことか。穏やかな川の流れの中に記憶は眠ったままだ。

一九四一年(昭和十五年)に諫早町と周辺六村が合併して誕生した諫早市は、昔から長崎、佐世大村市は、かつて大村藩の城下町として栄えた。まちには今でも当時を物語る数多くの史跡が点在しており、特に玖島城跡である大村公園は桜や花菖蒲の名所として知られている。一九七五年(昭和五十年)に長崎空港が開設されて以来、人と物の交流拠点として大きな役割を担ってきた大村市は今、ハイテク産業都市へと変貌を遂げようとしている。発展の道は、航空路という時代の道を通じて今も首都圏とつながっているのである。

長崎街道は、参勤交代の道、海外文化伝播の道、そして殉教の道でもあった

古松宿から松原宿に向かう途中、見事な桜の木がある旧円融寺を訪れた。春風に舞う桜の花を見ながら階段を上っていくと、左手に大村藩勤王三七士の碑、奥には大小の石を組み合わせた美しい庭園が広がっていた。旧円融寺は、捕鯨業で財をなした深沢儀太夫の寄進によるものと言われており、儀太夫は野岳湖を築造したことも知られている。

松原宿は大村宿から二里。かつては鍛冶屋のまちとして知られ、現在でも数軒が営業しているらしい。宿場に入ると通りがまっすくに続き、旧家の五色石垣が大村藩時代の風情を今に伝えている。

松原宿を出ると、街道は海沿いに彼杵宿へと続く。千綿宿を過ぎ、彼杵川を渡り、海岸へ向かうと日本二十六聖人乗船跡と言われた石碑がある。京都、大坂、堺、岡山、広島、博多、唐津を通



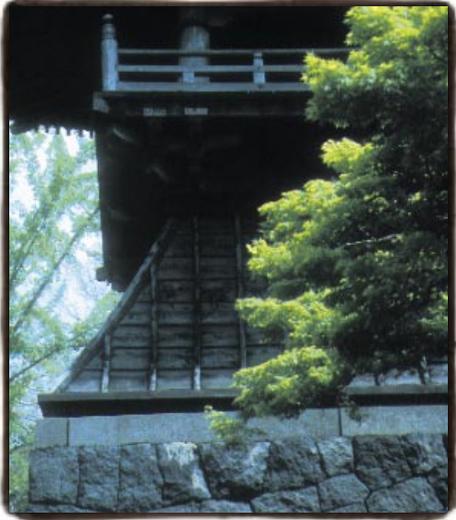
矢上宿跡(矢上神社)



古賀の藤棚



旧本田家住宅



風情ある永昌宿本陣跡(安勝寺)



諫早中核工業団地



鈴田峠入り口



弁慶の足形石



長崎空港



旧円融寺庭園



旧家の五色石垣



旧松原宿



鯨のまちとしての名残を伝える鯨問屋



九州横断自動車道



彼杵宿本陣跡

保島原、佐賀への交通の要衝として重要な役割を担ってきた。一九六二年(昭和三十七年)の貝津工業団地、一九七五年(昭和五十年)の中核工業団地の誕生とともに工業化が進み、さらに一九九一年平成二年の長崎自動車道の開通が県央の中核市としての発展を支えてきた。

現在、諫早市は先端技術産業の集積が進み、長崎県の新たな産業づくりの拠点として歩みはじめている。長崎街道によって栄えたかつての永昌宿は、今また平成の道によってその可能性を大きく広げつつあるのだ。

安勝寺から車で国道を走り、諫早から大村へと抜ける鈴田峠の入口へと向かった。

鈴田峠は、豊かな自然と歴史の宝庫である。苔むした石を避けながら歩き、時おり倒れかけた木々の下をくぐり、枯葉を敷き詰めた道を進む。人の気配はまったくない。ただ野趣あふれる道がひたすら風観岳へと続いている。

杉林と竹林が混在する森の中から突然バタバタという鳥の羽ばたきが聞こえ、一瞬足を止めて身構えてしまった。軽いため息をついてしばらく上っていくと、道はしだいに平坦になっ

ていく。

風観岳の頂上に近い街道沿いに、弁慶の足形石と呼ばれる大きな石が横たわっていた。ここから先が大村である。鈴田峠は平成八年に文化庁の歴史の道百選に選ばれており、風情のある道がさらに続く。しばらく歩いていくと視界が開け、街が見えてきた。穏やかな田園風景を楽しみながら峠を下り古松宿へ。民家のまわりを彩るペニカナメモチが、穏やかな光りの中できらきらと輝いていた。

つてこの地に着いた宣教師や信者たちは、ここから船で対岸の時津へ向かい、翌朝、長崎の西で処刑された。長崎街道は、参勤交代の道海外文化伝播の道でもあったばかりでなく、殉教の道でもあったのである。

彼杵宿は、本陣、脇本陣のほか問屋や旅籠、酒屋など多くの商家が建ち並ぶ活気のある宿場で、五島近海で取れる鯨の集散地でもあった。彼杵駅前には今も鯨問屋があり、鯨のまちとしての名残を伝えている。

彼杵宿があった東彼杵町は、美しい自然に恵まれたまちで、お茶の産地としても知られている。街道の標識をたどりながら彼杵川を渡り、しばらく歩くと、突然、頭上に九州横断自動車道がその威容を現す。街道はここから県境の俵坂峠へ、そして高速道路は街道をまたぐように俵野インターへと続く。ここは、過去と現代の立体交差点。二つの道はそれぞれの時代を物語りながら青空の向こうに伸びていた。



長崎街道は、多くのまちに繁栄をもたらした様々な文化を残していった。それは大名や長崎奉行、オランダ商館長や遊学者といった旅人だけの道ではなく、街道沿いに住む庶民の暮らしを支えた道でもあった。街道は今、その姿の大半を国道に変えたものの、往時の風情を残しながら現代へ、そして次代へと続いていく。

四季おりおりの美しい自然を楽しみながら、のんびりとその歴史の地層を訪ねる時きつとまだ見ぬ長崎の魅力に出会えるはずである。